

I 次のA・B・Cの文章を読み、それぞれ(1)～(10)の設問について〔 〕内の語句から最も適切と思われるものを選び、その記号を解答欄にマークしなさい。〔解答用紙㊦㊧〕(30点)

A 中国史において、「国家」がいつ、どのように発生したかという点については多くの議論がある。前3000年頃から黄河中・下流域で出現した(1)〔①紅山 ②竜山 ③仰韶 ④良渚〕文化では、「邑」と呼ばれる集落の周囲に城壁が築かれるようになり、労働力を動員することのできる強い権力を持った首長の出現がうかがえる。こうした集落の間でも格差が生まれ、規模の大きな「大邑」は周辺の邑を服属させていた。その中でも前2000年頃から黄河中流域に成立し、中国では文献中の夏王朝に比定されている(2)〔①三星堆 ②屈家嶺 ③二里头 ④河姆渡〕文化では、宮殿遺址が見つかっており、青銅器・玉器の安定的生産と周囲の邑への分配が確認されることから、このあたりを「初期国家」として認めてよいのではないかとする研究者は少なくない。こうした大邑が周囲の小邑を従えるシステムは「邑制国家」と呼ばれ、殷王朝が典型的なものとして認められる。ただし、殷では甲骨文字の使用、占いを利用した神権政治など、新しい要素が加わっている。

(3)〔①長江 ②淮河 ③黄河 ④渭水〕流域に建国した周は、天から支配の正統性を与えられたとの自己意識を持っていた。すなわち、先行する殷王朝は天命を失ったため、支配権が周に移ったとする考え方である。この考えはのちに(4)〔①孟子 ②荀子 ③孔子 ④墨子〕によって「易姓革命」という王朝交替の理論として整備される。周は一族や功臣などを諸侯として、領地や人民を分与した。この行為を一般には(5)〔①禪讓 ②封建 ③宗法 ④放伐〕と呼ぶが、これも周という大邑が諸侯という他の邑を従えるという意味では「邑制国家」の一バリエーションと考えられる。

犬戎と呼ばれる勢力の侵攻などで周王朝が(6)〔①洛邑 ②鎬京 ③長安 ④咸陽〕に移ると、周王朝の衰退は顕著となった。諸侯の中で強い力を持つ者は盟主として諸侯をまとめ、尊王攘夷の名目のもと、周王朝をもり立てて秩序を保とうとした。この立場の国の代表的なものとしては(7)〔①晋 ②魏 ③楚 ④

呉]が挙げられる。一方、周王朝を中心とする秩序に公然と挑戦し、「王」号を称して自身を中心とする秩序を形成しようとする者もいた。この立場の国の代表的なものとしては(8)〔①晋 ②魏 ③楚 ④呉〕が挙げられる。両者の君主はともに「春秋の五覇」に数えられることもあるが、その基本的な立場が異なるものであることには注意を払うべきであろう。ただし、諸侯の中の有力者が他の諸侯を従えるという構造は、依然として「邑制国家」の枠の中におさまるのではないだろうか。なお、この時代は、(9)〔①孟子 ②荀子 ③孔子 ④墨子〕が自身の仕えた魯の国の年代記に手を加えて編纂したとされる書籍の名称にちなみ、春秋時代と呼ばれる。

戦国時代に至るまでの間に、諸侯の兼併が進み、主に7つほどの強国にまで淘汰される。その背景には、鉄製農具の普及や(10)〔①塩の専売 ②占城稻の普及 ③牛耕の普及 ④五銖銭の鑄造〕によって経済発展が進んだことなどが挙げられる。ここに至って、大邑が他の邑を従えて間接的に支配する「邑制国家」の構造はすでに見られなくなり、強国は小国を滅ぼして直接支配下に組み込み、領域的に統治するようになる。諸国の君主はもはや周王朝の権威を無視して「王」を称するようになり、やがて周王朝を滅ぼした秦により統一されていく。

しかし秦の統治は長くは続かなかった。統一を果たした始皇帝の死後、各地に反乱が起き、秦は統一後わずか15年で滅亡した。その後、農民出身といわれる劉邦と、(8)の名門の出身の項羽の争いを経て、勝利した劉邦は漢王朝を建てた。

春秋時代と戦国時代は、ともに「分裂の時代」としてまとめられることが多いが、こうしてみると、春秋時代はその前の殷周時代との、戦国時代はその後の秦漢時代との連続性が強く、両者の間には大きな断絶がある。

B ムガル帝国の首都デリーの北東約60キロに位置するメーラトの (1)〔①ベク ②イエニチェリ ③デヴシルメ ④シバーヒー〕たちは1857年5月、一斉に蜂起し、デリーに進軍した。鎮圧まで2年余もの歳月を要することになった、いわゆるインド大反乱の開始である。

この反乱の背景には、いくつかの政治・社会・文化的な要因が複雑に絡まりあいつつ存在していた。そもそも東インド会社がインド人の (1) を傭い入れ、軍事力として使用するようになったのは、(2)〔①パーニーパット ②ブラッシー ③シャンデルナゴル ④チャルディラーン〕においてベンガル太守・(3)〔①スペイン ②フランス ③イタリア ④ポルトガル〕連合軍を破った1757年のことであつた。この戦いによって東インド会社はベンガルの支配権を確立し、1765年には同地方の徴税権 (4)〔①ディーワーニー ②イクター ③ザミンダーリ ④マンサブダール〕を獲得した。その後、カルナータカに拠る (5)〔①ヴィジャヤナガル ②マイソール ③シク ④チョーラ〕王国を倒し、南インドにまで支配権を拡大した。こうした東インド会社の支配領域の拡大は傭兵 (1) らによって支えられた軍事力に多くを負っていた。征服事業のなかでイギリスは積極的に (1) を傭い入れ、大反乱前夜その数は20万人に達していた、といわれる。

(1) を反乱に駆り立てた直接的な契機としてよく指摘されるのは、イギリスで開発された最新のエンフィールド銃が同年2月に東インド会社の軍隊に配備されたことだつた。従来のマスケット銃に比べ有効射程距離を4倍以上に伸ばすなど、高性能化を実現したこの銃は、湿気を予防し滑りをよくするために動物の脂を塗ってある紙製の火薬包を装填の際に噛み切ることが必要とされた。(1) たちはそれが (6)〔①羊 ②ゾウ ③牛 ④馬〕や豚の脂であると見なし、激しく抵抗したのである。なぜなら (1) の多くは高位カーストのヒンドゥーと上層イスラム教徒であり、ヒンドゥーたちにとって (6) は聖なる動物にほかならず、イスラム教徒にとって豚は汚れた動物であつた。彼らにとり、油脂の塗ってある火薬包を使用するかどうかは、自らの宗教的アイデンティティにかかわる重大な問題であつた。ムガル朝時代、とりわけヒンドゥーとの共存をめざした第3代皇帝 (7)〔①シャー = ジャハーン ②アクバル ③バーブル ④アウラングゼーブ〕帝は、臣民に配慮し、(6) の屠殺・肉食を認めなかつたといわれる。こうしたヒン

ドゥーとの融和政策の記憶は当時も息づいていたのであり、それだけに東インド会社の新方針は彼らには受け入れがたかった。とりわけヒンドゥー教徒は、あえて禁忌を冒せば、アウトカースト、すなわち不可触民となる運命を免れないと受け止めたのである。

大反乱に加わったのは(1)だけではなかった。反乱の中で頭角を現し、「インドのジャンヌ＝ダルク」とも讃えられた(8)〔①ムムターズ＝マハル ②インディラ＝ガンディー ③ラクシュミー＝パーイー ④カルティニ〕は、ジャーンシー王国の王妃であった。ジャーンシー王国は、(9)〔①ティラク ②ナーナク ③ジンナー ④シヴァージー〕の創始したマラーター王国に属していた。しかし、東インド会社は、19世紀半ばには藩王国の弱体化を狙って王位継承権を嫡系男子に限定し、かつ養子相続による王国の継承を認めない方針を打ち出した。王国の危機が迫るなか、王妃(8)が大反乱に加わっていくのは自然な成り行きであったといえよう。(8)は看護兵のみならず砲兵等を含む女性部隊を創設したことで知られ、後のインドの民族運動にも大きな影響を与えた。1943年、インド国民軍を指導し、反英闘争を展開した(10)〔①ナセル ②スカルノ ③チャンドラ＝ボース ④ホー＝チ＝ミン〕もまた、(8)にならい、女性部隊を組織した指導者であった。

しかし、(1)たちは、各地域で萌芽的な政治組織を登場させたが、各地の蜂起を統合する新たな政治的枠組を創出するには至らなかった。インドの人々の政治参加や自治を獲得するという課題は、20世紀に入り、ヨーロッパ留学組を含め、知識人やエリート層を含むインド国民会議派の登場を待たねばならなかった。

C 日本列島と朝鮮半島は、古代から深い関係にあったことはよく知られている。

『漢書』地理志に「夫れ楽浪海中に倭人有り。分れて百余国となる。…」との記載があり、これは日本についての文字記録として最も古い時期のものの一つとされている。ここにいう「楽浪」とは、漢の(1)〔①武帝 ②高祖 ③光武帝 ④文帝〕の時代に衛氏朝鮮が滅ぼされた後に置かれた4つの郡の一つのことであるが、その後楽浪郡は4世紀に(2)〔①新羅 ②高句麗 ③百済 ④加耶〕に滅ぼされている。なお、(1)の時代の中国では儒学の影響力が強まっていったが、(1)に仕えた(3)〔①司馬遷 ②班固 ③董仲舒 ④鄭玄〕は、『漢書』やそれ以後の正史にも受け継がれた中国の歴史書の基本的なスタイルを作った人物である。

日本に仏教が伝来したのは朝鮮半島からだが、朝鮮半島では長らく仏教が尊ばれてきた。仏国寺の造営や(4)〔①新羅 ②百済 ③高麗 ④高句麗〕における大藏經の印刷などはそのあらわれといえよう。

しかし、(5)〔①李世民 ②李舜臣 ③李成桂 ④李自珍〕によって朝鮮王朝が立てられると次第に儒学を尊重する気運が高まり、科挙や朱子学が中国から導入されることとなった。朱子学は南宋の朱熹によって宋学が大成されたものだが、朱子学においては、宋学の祖は(6)〔①周敦頤 ②陸象山 ③王安石 ④司馬光〕だと理解されている。

科挙制とも関連して、16世紀以降の朝鮮では「両班」の力が特に強まった。その後、朝鮮は清の皇帝の位についた(7)〔①エセン ②ホンタイジ ③アルタン ④ヌルハチ〕による侵攻を受け、清への朝貢を余儀なくされた。他方で、朝鮮は形の上でこそ満洲族の清に朝貢しているものの、実は朝鮮こそが明から正統な中華文明を受け継いでいるという意識が生じていった。

19世紀半ば以降、朝鮮は欧米諸国の開国要求を拒否しつづけてきたが、1875年に日本は朝鮮に対して武力挑発を行い、翌年日朝修好条規によって朝鮮は3つの港を開港することとなった。この修好条規の第1款には「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ…」とあり、この条文の内容は日本側が、朝鮮が朝貢していた清の勢力を排除する意図があったともいわれている。一方、朝鮮の宗主国である清は、アヘン戦争の結果として5つの港を開港し、さらに1860年の北京条約で華北の(8)〔①漢

口 ②厦門 ③天津 ④寧波]などを開港させられていた。近代的な外交関係に巻き込まれていく中で、清は朝貢国であった朝鮮への干渉を強めてゆき、朝鮮国内では日本に接近する「開化派（独立党）」と清との関係を重視する「事大党」の対立が生じた。1884年には前者が蜂起して(9)〔①壬午軍乱 ②江華島事件 ③義兵闘争 ④甲申政変〕が起こったが、この蜂起は袁世凱らが率いる清軍によって鎮圧され、失敗に終わった。この事件の事後処理のために日本と清の間で天津条約が結ばれ、将来朝鮮に出兵する際は相手側に事前通告することなどが定められた。19世紀末の朝鮮では(10)〔①全琫準 ②金玉均 ③崔濟愚 ④盧泰愚〕を開祖とする東学が広まり、1894年には反乱を起こすに至った。この反乱が拡大して甲午農民戦争となり、日清両国はその鎮圧を口実にして朝鮮に出兵し、それが日清戦争の大きなきっかけとなった。

Ⅱ 次のA・Bの文章を読み、それぞれ(1)～(10)の設問について〔 〕内の語句から最も適切と思われるものを選び、その記号を解答欄にマークしなさい。〔解答用紙 $\square$ 〕(20点)

A 1497年、ポルトガル王マヌエル1世の命により、ヴァスコ＝ダ＝ガマの艦隊はリスボンを出帆した。その目的は、一つには伝説上のキリスト教君主プレスター＝ジョンと誼を通じて中近東のイスラーム勢力を挟撃することであり、また一つには黄金や香辛料を得るべく、インドや東方との直接の貿易路を開拓することだった。1494年にスペインとの間で両国の支配領域の分割線を定める(1)〔①カトー＝カンブレジ条約 ②サラゴサ条約 ③トルデシリャス条約 ④ピレネー条約〕が結ばれ、ポルトガルはコロンブスの「発見」した西回りの航路から排除されたため、東回りの航路の開拓に期待がかかっていたのである。

ポルトガルでは、既にエンリケ航海王子の頃から西アフリカの探索が行われ、ジョアン2世の治世の1488年には(2)〔①カボット父子 ②バルトロメウ＝ディアス ③バルボア ④ラス＝カサス〕が喜望峰に到達していた。ガマの航海はそれらの延長である。

大西洋を南下して喜望峰を通過した彼の艦隊は、アフリカ東岸を北上した。ヨーロッパ人にとって未知だったこの地方は、夙にイスラームの影響が及び、季節風を利用した(3)〔①ガレオン船 ②ガレー船 ③ジャンク船 ④ダウ船〕によるインド洋交易でアラビアやインド、さらには東南アジアとも結びついていた。ガマの一隊は、モザンビークやモンバサでは現地民の警戒と猜疑を招いたが、その後に辿り着いた現ケニアの(4)〔①アデン ②マラケシュ ③マリンディ ④モガディシュ〕では友好的に迎えられ、熟達した水先案内人を雇うことができた。その導きによってガマはアラビア海を横断し、インド西岸のカリカットに到着した。だが、ガマを迎えたカリカットの君主は贈り物の貧弱さに失望し、ムスリム商人の反発もあって、ポルトガルとの通商にはあまり関心を示さなかった。

ガマが開拓した航路を生かしてインドとの交易を進展させようと、ポルトガルは続いて(5)〔①カブラル ②カルティエ ③コルテス ④トスカネリ〕を長とする新たな艦隊を派遣した。彼は、初めは針路を誤って南米大陸に漂着したが、

最終的には喜望峰を回ってインドに到達した。ただ、カリカットに商館を築く許可を得たものの、彼らがムスリムの商船を拿捕したことをきっかけに、商館は焼き討ちにあう。これに対して(5)はムスリム商人たちを襲い、町を砲撃した。

1502年に行われたガマの二度目の航海は、カリカットでの商館焼き討ちへの報復を名目とするものだった。その途上、彼は現タンザニアのキルワを武力と脅迫で屈服させた。この町は、ザンベジ川南方の(6)〔①ガーナ王国 ②カネム＝ボルヌー王国 ③ソンガイ王国 ④モノモタパ王国〕で産出する金や象牙などの交易で栄える海港だった。ガマは、インドに到着すると、ムスリムの船を襲撃して巡礼者や商人たちを惨殺し、カリカットに激しい攻撃を加えた。

ガマの帰国後、ポルトガルは、アルメイダをインド副王に任じて艦隊を派遣した。彼はアフリカ東岸の諸都市を武力で制圧して要塞を築き、インドでも各地のイスラーム勢力と戦火を交えた。1509年のディウ沖の戦いでは、紅海やアラビア海を勢力下に収めていたエジプトの(7)〔①アイユーブ朝 ②サファヴィー朝 ③マムルーク朝 ④ムラービト朝〕とインド諸侯の連合海軍を破り、アラビア海の航路を掌握した。翌年には、アルブケルケがインド総督として派遣され、(8)〔①コーチン ②ゴア ③ホルムズ ④ボンベイ〕を攻略し、総督府を置いて植民地経営の拠点とした。続いて彼は、中国や東南アジアとの中継貿易地だったマラッカに遠征して陥落させ、同じように拠点を築いた。マラッカ王国のスルタンはマレー半島南部に逃れて抵抗を続け、その一族は(9)〔①アチェ王国 ②ジョホール王国 ③バンテン王国 ④マタラム王国〕を建てた。

このようなポルトガルのインド洋進出は、それまでヨーロッパにおいて東方との香辛料貿易を独占していた(10)〔①アムステルダム ②ヴェネツィア ③セビリャ ④ナポリ〕に打撃を与え、リスボンやアントウェルペンが貿易港として台頭する契機となった。ただ、インド洋の各所に置かれた拠点とネットワークの維持は大きな負担でもあった。1524年、ガマは、弛緩したインド洋支配の立て直しのために三度目の航海に派遣されたが、任務を十分に果たす前に現地で病没した。

B 18世紀後半に生じた、アメリカ独立革命とフランス革命は世界史の大きな転換点となった。

イギリス本国による北米植民地への課税政策に対する反発から始まった闘争は、(1)〔①ジェファソン ②ハミルトン ③ イン ④コンドルセ〕が著した『コモン=センス』の影響などもあり、独立戦争に発展した。植民地軍は当初劣勢であったが、ヨーロッパ諸国の援助を受けて戦争に勝利し、1783年のパリ条約でイギリスからの独立を達成し、やがてアメリカ合衆国という連邦国家が建国された。アメリカはミシシッピー川以東ではイギリスからスペインに割譲された(2)〔①ルイジアナ ②ケベック ③フロリダ ④テキサス〕を除く広大な領土を獲得した。それ以降も1803年に(3)〔①フランス ②スペイン ③イギリス ④メキシコ〕からミシシッピー以西の広大な土地を購入した。さらには、19世紀半ばには、メキシコと戦争し、現カリフォルニアやアリゾナなどの領土を奪い、20世紀にイギリスに代わって世界の覇権国となるための地盤を固めた。他方、植民地時代からとくにアメリカ南部州に定着していた奴隷制は、奴隷制に反対する北部と支持する南部の対立を招き、19世紀半ばには国を二分する南北戦争を引き起こした。この戦争は多数の戦死者を出したが、1865年、北部が(4)〔①ジョージア州 ②テキサス州 ③イリノイ州 ④ヴァージニア州〕にある、南部連合の首都リッチモンドを占領して間もなく終結した。南北戦争により、アメリカ合衆国の対外拡張傾向は一時停滞したが、19世紀後半、スペインとの戦争により、(5)〔①キューバ ②パナマ ③ハワイ ④プエルトリコ〕を併合した。

フランス革命は、フランス・ブルボン朝の財政危機を解決するために開始されたが、やがて国・社会の根本的な変革を目指す運動へと発展していき、身分制の廃止、農地分配、王政の廃止などを次々と実現していった。しかし、革命の過程で穏健改革派は失脚し、(6)〔①ミラボー ②ロベスピエール ③タレーラン ④ブリッソ〕ら急進派による恐怖政治が成立した。対外的には、革命を輸出し、ヨーロッパ諸国民を解放するというスローガンの下、1797年に、(7)〔①オランダ ②スペイン ③イギリス ④オーストリア〕領であった南ネーデルラントを併合し、その後も、オランダやイタリアに衛星国家を作っていた。しかし、イギリスやオーストリアといった主敵に勝利するためには、党派対立が絶えない共和政

では不適切だという認識がフランス政界では勢いを得て、1799年、有力な将軍・ナポレオン＝ボナパルトに権力を集中させる (8)〔①総裁政府 ②統領政府 ③第一帝政 ④救国政府〕が発足した。ナポレオンは、(9)〔①徴兵制 ②奴隷解放令 ③民法典 ④人権宣言〕の発布などの内政上の功績に加えて、ヨーロッパ大陸では、オーストリアやプロイセンを打ち負かし、一時的に覇権を握った。しかし、経済力と海軍力に基づくイギリスの優位をつき崩すことはついにできず、かえってフランスに都合の良い経済政策の強行によってヨーロッパ大陸諸国の不満を招き、最終的にロシア遠征に失敗して、1814年に反仏同盟諸国軍に敗北した。

ナポレオンの失脚後、いわゆるウィーン体制が築かれるが、それはフランス革命以前の秩序への復帰ではなかった。スペイン・ポルトガルの中南米植民地の多くが独立し、またフランス革命の掲げた、自由、平等、独立といった理念はヨーロッパに浸透した。フランスでは1830年に (10)〔①二月革命 ②三月革命 ③十月革命 ④七月革命〕が生じ、1815年に復興していたブルボン朝が倒れた。

Ⅲ 次の文章は、A. プロスペリ著、大西克典訳『トレント公会議——その歴史への手引き——』（知泉書館、2017年、6ページ）の文章を一部抜粋したものである（文章を変更した箇所がある）。この文章を読んで、下記の設問(1)～(10)に答えなさい。〔解答用紙<sup>記述</sup>〕（22点）

トレント公会議では、とりわけ政治的な事案が目立つが、これはキリスト教会の公会議の歴史においては常にそうなのである。がニケーア公会議<sup>(2)</sup>を主催して以来、教会の決定は政治の世界においても最高の重要性を持っていた。皇帝権力の長い鎮静によってはじめて、中世後期の公会議<sup>(3)</sup>は自分自身に関することを決定するために集められた聖職者が、聖職者社会の内部の事実を扱うという性格を与えられることになる。しかし、教皇権の危機、西ローマ帝国の終焉、各君主国の新しい政治的<sup>(4)</sup>重み、カール5世とハプスブルク家の帝国の野心<sup>(5)</sup><sup>(6)</sup><sup>(7)</sup>といったものが、公会議が再度キリスト教徒の最高の会議となるような条件を生み出していくのである。

実際のところここで問題になってくるのは、実現することなく終わるものの地平線上に長い間姿を見せているある可能性なのである。理論上は全キリスト教徒の公会議であるこの会議は、二重の意味で分裂したキリスト教徒の一派の会議に留まる。というのも、東方のキリスト教徒とアウグスブルクの信仰告白のキリスト教徒<sup>(8)</sup>たち（つまり派）はほんの僅かに顔を覗かせるに過ぎない。また、出席した司教たちを調べてみれば、ローマ教皇の側に留まった国の司教たちの中にさえ欠席が目立つことが分かるだろう。そしてひとたび会議が終わるや、ヨーロッパのキリスト教徒のほんの一部はその成果を認識し、その決定を受け入れて実行に移す。別の大きな一派は代表を送らず、会議の有効性を否定した。至高の一体性の名において、超国家的かつ多民族的な帝国の庇護の下、ヨーロッパのキリスト教の中に生じた亀裂を修復するためにトレントで開催された公会議<sup>(10)</sup>は、かくしてもはや定まってしまった分裂の枠組みの中で幕を閉じることになる。

〔設問〕

(1) 空欄には、ニケーア公会議の時のローマ皇帝の名前が入る。この皇帝の名前を答えなさい。

- (2) 下線部(2)の会議において、父なる神と子なるイエスは同質と主張し、のちの正統教義の確立に寄与した宗派の名前を答えなさい。
- (3) 下線部(3)について、中世後期に公会議が活発に行われた背景には、教皇権の衰退やそれに伴う混乱があった。この点に関する以下の問題 a. b. に答えなさい。
- a. フランス国王は、聖職者課税問題で衝突した教皇ボニファティウス 8 世を捕らえた。このフランス国王の名を答えなさい。
- b. 中世後期に開催されたコンスタンツの公会議で異端とされた14世紀の思想家ウィクリフの思想は、1381年にイギリスで起こったワット＝タイラーの乱に影響を与えたと考えられている。この乱を思想的に指導した聖職者の名前を答えなさい。
- (4) 下線部(4)について、西ローマ帝国を滅ぼした人物の名を答えなさい。
- (5) 下線部(5)に関して、各地の君主国について述べた次の文章 a～d について、時代の古いものから順に正しく配列したものを、下の①～④から一つ選びなさい。
- a. アングロ＝サクソン王国がクヌートに征服された。
- b. リトアニア人がポーランドと同君連合を結んでヤゲウォ朝リトアニア＝ポーランド王国をつくった。
- c. イエルサレム王国が建国された。
- d. ノルマン人の一派がノヴゴロド国を建設した。
- ① c → d → b → a
- ② d → a → b → c
- ③ c → a → d → b
- ④ d → a → c → b

(6) 下線部(6)の人物の息子であるスペイン王は、イギリス侵攻を目指し無敵艦隊を派遣したが敗れた。この無敵艦隊の名前をカタカナで答えなさい。

(7) 下線部(7)に関して、ハプスブルク家やその同盟勢力が関わった戦争について述べた次の文章 a～d について、時代の古いものから順に正しく配列したものを、下の①～④から一つ選びなさい。

- a. 三十年戦争が開始された。
- b. 第二次ウィーン包囲が起こった。
- c. オランダ独立戦争が起こった。
- d. プレヴェザの海戦が起こった。

- ① c→d→b→a
- ② d→c→a→b
- ③ a→d→b→c
- ④ d→a→b→c

(8) 下線部(8)に関連して、10世紀末にギリシア正教に改宗し、これを国教としたキエフ公国の君主の名を答えなさい。

(9) 空欄  には、『キリスト者の自由』を書いた宗教指導者の名前が入る。この人物の名を答えなさい。

(10) 下線部 (10) に関連して、トレント（トリエント）公会議に象徴される、16世紀のカトリックの自己改革の動きとして、誤っているものを、下の a～d の中から一つ選びなさい。

- a. 禁書目録が作成された。
- b. ラテン語聖書の正統性が否定された。
- c. 異端に対する宗教裁判が強化された。
- d. 聖母や聖人の崇敬が再確認された。

IV 以下の各文章1～4にはそれぞれ明白な誤りが一つずつ含まれている。誤りの語句を解答用紙の所定のA欄に、それに替わるべき正しい語句をB欄に記入しなさい。また各文章1～4に付された設問(1)～(4)の答えを解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〔解答用紙記述〕(16点)

1. トマス＝ジェファソンが中心となって起草した1776年のアメリカ独立宣言では「すべての人は平等に作られていること」が自明の真理とされたが、南北戦争に至るまで奴隷制を認める奴隷州が多く存在していた。1863年にはリンカンによって奴隷解放宣言がなされたが、1890年頃から南部諸州で総称としてホームステッド法と言われる黒人差別の体制が再確立されていったように、黒人差別は根強く残り続けた。そのような差別を撤廃するための公民権運動は1960年代に高揚した。非暴力主義を掲げてそれを指導したキング牧師は、1963年のワシントン大行進での「私には夢がある」というフレーズで知られるようになった演説を行い、翌年、ノーベル平和賞を受賞したが、1968年にテネシー州メンフィスで凶弾に倒れた。

設問(1) 1963年に前大統領の暗殺により副大統領から大統領に昇格し、「偉大な社会」建設を掲げたアメリカ第36代大統領の名前を答えなさい。

2. ローマ共和政は、伝承によれば、前6世紀末にガリア出身の王を追放して成立した。国家の最高指導者はコンスルと呼ばれる任期1年の2名の公職者であった。また、公職経験者から成る元老院が、大きな権威を持っており、実質的に共和政ローマの政治を指導していた。共和政前期には、公職に選ばれて元老院議員となれるのは、特定の家系に生まれた貴族(パトリキ)だけであり、ローマ軍の主力である重装歩兵となる平民(プレブス)が、不平等の是正を強く求めた。前5世紀初めには平民だけの集会である平民会と平民の政治的指導者である護民官の存在が認められ、前4世紀半ばにはリキニウス・セクステイウス法でコンスルの1名が平民から選ばれることが定められた。さらに前3世紀前半にはホルテンシウス法で平民会決議が貴族をも縛る国法となった。

設問(2) 前4世紀半ば以降、平民中の富裕な有力者たちが、従来の支配層と社会的に融合して、新たな支配層を形成した。この新支配層の呼称を、カタカナで答えなさい。

3. 円明園は、清の時代に建設された北京郊外の離宮であり、バロック式西洋館を含む庭園であった。この円明園の設計には、イエズス会宣教師のマテオ＝リッチが加わっていた。彼はヨーロッパの画法を清朝に紹介したことで知られる。清朝の康熙帝、雍正帝、乾隆帝は、いずれもイエズス会宣教師を技術者として活用していた。そうした宣教師のなかには、暦の改訂で知られるアダム＝シャルルや、『皇輿全覧図』作成で知られるブーヴェなどがいた。

設問(3) 円明園はある戦争において、イギリスとフランスの連合軍によって略奪・破壊の被害にあい、廃墟となった。この戦争の名称を答えなさい。

4. 中国国民党は、孫文が五・四運動などに刺激され、1919年10月にそれまでの秘密結社的組織を改組したものである。当時、ロシア革命の成功は中国にも大きな思想的影響を与えており、またソヴィエト＝ロシアが1919年7月に外務人民委員代理のカラハンの名で旧ロシア帝国が中国に有していた特権の放棄を宣言したことは、多くの中国人に好感を抱かせた。孫文も、1923年にソ連のボロディンを中国国民党の顧問として迎えている。1924年1月には中国国民党第1回大会が開催され、第1次国共合作が成立し、毛沢東らは中国国民党に入党した。1925年3月に孫文は死去したが、同年5月には上海での労働争議を契機に五・三〇運動がおこり、7月には南京国民政府が樹立された。

設問(4) 第1次国共合作は、蔣介石による上海クーデタによって崩壊へと向かった。上海クーデタ当時、国民政府は武漢に移っていたが、この武漢国民政府の中心人物の一人であり、後の日中戦争期には親日政権のトップとなったのは誰か、人名を答えなさい。

V 次の文章は、フィリップ・スコフィールド著『功利とデモクラシー——ジェレミー・ベンサム政治思想』（慶應義塾大学出版会，2020年）の第8章（戒能通弘訳，pp. 269-97）の文章を一部抜粋したものである。（一部省略した部分を [...] で示す。）この文章を読んで、下記の設問(1)～(12)に答えなさい。〔解答用紙記述〕（32点）

1792年末に書かれた、最初の体系的な反植民地論である「ジェレミー・ベンサムからフランス国民公会へ」においてベンサム<sup>(1)</sup>が表明した見解は、フランス革命がまさに始まった時<sup>(2)</sup>に書かれた「経済についての短い所見」において先取りされていた。後者の論考においてベンサムは、フランスを脅かしていた財政危機を克服するための手段についてフランス国民議会に助言を提供した。フランスの植民地を解放することは見込みのある経費削減元であったが、それは軍への費用を減らし、「すべての濫費の中で最も悲しむべきもの」であった戦争の可能性を縮小することに資するものでもあっただろう。植民地は「膨大な費用の源泉」であっただけでなく、全費用が「無駄」であった。この費用は、植民地の統治や軍隊の駐留のための恒常的費用、防衛や海軍による保護の提供、「植民地に関する争いが要因であるような戦争の際の支援を獲得するため締結される同盟条約<sup>(3)</sup>のために与えられる報酬金」などに加えて、戦争時に植民地を守るための一次費用、さらに植民地に関する争いによって生じる戦争のための費用の総計からなっていた。 [...]

「経済についての短い所見」からほどなくして書かれたと思われる「植民地と海軍」という見出しがつけられた草稿においてベンサムは、潜在的な紛争の対象を増加させることで戦争の可能性を増加させるものであったから、「どのようなものであれ、何らかの海外の属国をもつことはグレート・ブリテンの利益ではない」と主張していた。植民地を維持する主要な「公然の理由」のひとつは「貿易上の利益」であった。しかしながら、(4)も認めていたように、一国の貿易は所有していた資本の量に限定されていたことは自明であり、植民地は何ら経済的利益をもたらさなかった。この原則から、「どのようなものであれ、見せかけの貿易の奨励のためのすべての法<sup>(5)</sup>や公的施策、競合する外国貿易の完全な禁止、どのようなものであれあらゆる形の奨励金、一時的な苦境のために一時的救済を与えること以外を考

慮した外国のものでなく自国の製品を消費するための輸入の拒否の合意や誓約のすべて<sup>(6)</sup>は、役に立たず有害であるということが引き出された。[...]

スペインにその植民地<sup>ウルトラマリア</sup>の支配を放棄するよう〔「植民地を放棄せよ」等の論説を書いて〕説得しようとした時、スペイン領アメリカ<sup>(7)</sup>の多くが急速に独立に向かっていった点を考慮すればすでに当を得ていたが、それらに対する支配権を行使することへのあらゆる要求を放棄するようスペインを説得しようとする中で、ベンサムは植民地の保持によって被る経済的損失をさらに強調した。植民地の人々は、たとえ十分に資金を有していたとしても、スペイン半島の政府の費用をまかなうために課税されることに進んで同意することはなかっただろうし、通商からのいかなる利益も自由貿易という条件のもとで十分に生じたであろうし、植民地が独立していれば最もよく促進されただろう。支配から生じる唯一の可能な利益は、スペインの支配者のうち小さな部分<sup>(8)</sup>を利するものだった。[...] ベンサムは、半島および植民地のスペインの支配者と対置される人民<sup>(8)</sup>が、ひとつですべてを含有しうる利益——すなわち、代議制民主主義に基礎付けられた彼ら自身の個別の政府によって統治されること——を共有していると信じていた。[...]

1801年に、したがって1792年に書かれたフランスのための論説と1820-2年に書かれたスペインのための論説の間に書かれた文章において、ベンサムは植民地の保持と植民地化について肯定的な態度を示していた。[...] 全体的に見ると、植民地の設立は富の増加という結果になった。土地は労働とともに富の増加に必要であって、植民地化によって獲得された土地は、「一般的には優れた類」<sup>(9)</sup>のものであったし、「価値あるものにするために採集と運搬以外には何も必要としない原料もまた豊富である」。[...] 国富の増加の損失を相殺する唯一の補償は、砂糖、茶、コーヒー、チョコレート、コチニール<sup>(10)</sup>、インディゴのような新しい商品の導入を通じた産物の多様化であった。「新しさと多様性が愉楽の源泉であるならば、これらが増えるにしたがって、量に関してではなく、価値に関して富が増加する」。イギリスに関しては、ベンサムは、人口がそれ以前と同じように新しい世紀にも急速に増加し続けたならば、「相対的な富裕の大幅な減少、全体的な貧困と貧苦という耐え難い感覚」につながり、最終的には生存の手段を凌駕してしまうことにつながっていくのではないかと心配していた。使用されていない土地の植民地化は解決策になっ

ただろう。[...]

ベンサムが1831年に南 (11) 植民地化計画を提案したのは、高い貧困率、農業の不安定、人口増加の影響についての全般的な悲観によって特徴づけられるような、救貧法の運用が危機に陥っていた状況においてであった。1801年に彼が表明していた、無人の土地の植民地化の便益についての見解が再び見られるようになったが——それは違いを伴っていた。彼の政治的急進主義は、彼がもはやイギリスの制度の移植も、ごく一時的なイギリスによる統治以外のものも支持することができなかったことを意味していた。南 (11) 植民地化計画は特許を与えられた会社によって運営されることになっていたが、その会社は費用を負担できる人に植民地の区画した土地を売却するか、すぐに区画を買えない人をそうするのに十分な金銭を稼げるまで雇うことになっただろう。植民地は、最初は会社によって任命された領事によって統治され、それによってイギリス政府の手に官職授与権が置かれないように<sup>(12)</sup> することを確実にした。

〔設問〕

(1) 下線部(1)について、以下の問題 a. b. c. に答えなさい。

- a. ジェレミー = ベンサム (1748 ~ 1832) はその生没年にふさわしく、統治のあり方をめぐる彼の思想を通じて現代にいたるまで影響力を及ぼしてきたが、彼が生まれた年に刊行されたモンテスキューの主著は何か、書名を答えなさい。モンテスキューはウィーン、ハンガリー、イタリア、ドイツの都市を巡り、アムステルダムからイギリスに渡って過ごした後に、各国の政治・法体制を考察し、この主著において、イギリスをモデルに権力分立と王権の制限を説いた。
- b. またベンサムはイギリスのホイッグ党内閣によって実現した議会改革の年に没しているが、この議会改革の名称を答えなさい。この改革による恩恵を得られなかった人々の一部は、その後、人民憲章として発表された6条からなる民主的な政治綱領を掲げてチャーティスト運動に参加した。
- c. ベンサムは快楽と苦痛を軸にした功利主義の論理的枠組みを打ち出したが、そこでベンサムが唱えたとされる有名な標語を答えなさい。彼は、快楽の享受と苦痛の享受の量的なバランスを目標として掲げる原理を説き、君主や貴族の利益を犠牲にして代議制民主主義を確立することを主張して、この原理に基づいて法典編纂の作業を飽くことなく積み重ねた。

(2) 下線部(2)について、以下の問題 a. b. に答えなさい。

- a. フランス革命の発端とされる事件が起きた監獄の名称を答えなさい。この日、パリ市民は財政改革を進めようとしていた財務総監が罷免されたことに反発し、武器と弾薬を求めて集結して、絶対王政の象徴とされたこの監獄に向かった。
- b. また、スイス出身の銀行家で、フランスでは第三身分のブルジョワであり、特権身分への課税などを提案して民衆の人気を得ていたが、a. の事件の前に罷免されていた財務総監の名前を答えなさい。

- (3) 下線部(3)について、以下の問題 a. b. に答えなさい。
- a. サラトガの戦いで勝利したのちにフランスと同盟条約を結んだ国の名称を答えなさい。この同盟により、フランスは、最恵国待遇の貿易関係や戦争によって獲得する領土の領有権を保障されたが、参戦による戦費は財政を圧迫した。
- b. この同盟条約締結のきっかけとなったサラトガの戦いの後に戦況全体に決定的な影響を与えた戦いを勝利に導いた軍人政治家の名前を答えなさい。この軍人は、フランスの自由主義貴族で、義勇軍を率いて加わっていた。
- (4) 空欄  にはいる人名を答えなさい。『諸国民の富』を著したこの人物は、「見えざる手」による市場経済の原理を説いた。ベンサムはこの書の中の広範な反植民地の見解に影響を受けて、フランス革命期における植民地に関する経済的考察を執筆した。
- (5) 下線部(5)について、(4)の人物が後に異議を唱えた重商主義政策の一環として1651年の共和政期に制定された法律の名称を答えなさい。この法律はオランダ商人の貿易活動からの排除を狙ったものだったが、ベンサムはイギリスが他国からの侵害を恐れる根拠はないのだから、海賊から交易を守るために海軍を強化し続ける必要はないとした。
- (6) 下線部(6)について、イギリス経済に打撃を与え、フランス産業によるヨーロッパ市場の支配を目指してナポレオン1世が発した勅令の名称を漢字で答えなさい。トラファルガーの海戦に敗れたフランスは大西洋植民地への海路が絶たれたため、この勅令により経済戦を仕掛けて、他のヨーロッパ諸国に圧力をかけた。

- (7) 下線部(7)について、ベンサムはアルゼンチンの革命家で政治家のリヴァダヴィアへの手紙で「すべての植民地は本質的に害悪である」と述べて、活動を支援したが、その後、同じくアルゼンチン出身で、独立戦争を勝利に導いた後にチリやペルーに進軍してスペインから解放した人物にも、手紙を送っている。この軍人・指導者の名前を答えなさい。
- (8) 下線部(8)について、スペイン王室がイベリア半島生まれの白人優遇政策をとったことに対し、不満を抱いて独立運動の主役となった、スペイン領アメリカ植民地生まれの白人の呼称を答えなさい。この呼称は、元来は、アフリカ大陸ではなくアメリカ植民地で生まれた黒人を、現地生まれとして区別するスペイン語の形容詞であった。
- (9) 下線部(9)について、17世紀以降にスペイン領アメリカ植民地の肥沃な土地を大規模農業に利用し、先住民や黒人奴隷を労働力に用いて商品作物を栽培させた制度（土地所有の形態）の呼称をスペイン語のカタカナで答えなさい。
- (10) 下線部 (10) について、このカイガラムシに由来する赤い色素はメキシコ中央高原に栄えていた王国において、スペイン人コルテスによる滅亡以前から、織物の染色用に使われていた。この14～16世紀にわたって栄えた王国の名称を答えなさい。
- (11) 空欄  にはいる植民地の名称を答えなさい。この植民地は、1770年以降に流刑地として東海岸から開拓が進んだが、西海岸までイギリスの領有となった後に、自由民による植民地移住も認められるようになった。ベンサムは、パノプティコン構想と呼ばれる本国での刑務所改革プランとの対比で、以前からこの植民地の運営に強い関心を示していた。

- (12) 下線部 (12) について、1295年にエドワード1世によって召集された模範議会の議院のうち、一つの名称を答えなさい。この議院はペンサム<sup>ペンサム</sup>の時代を経て現代に至るまでしばしば官職授与権<sup>バトロキジ</sup>との関わりが批判されてきたが、1999年の法律により中世以来大きな割合を占めてきた特定の人々の議席数が大幅に制限されることになるなどして、改革が少しずつ進んできている。